

週刊センターニュース No.43

第 43 号 (2005 年 1 月 11 日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm



共同学習会のお知らせ

第 54 回 日時: 1 月 13 日 (木) 16:20 ~ 17:50

場所: 角間キャンパス総合教育棟 2 階会議室

テーマ: 「共通教育カリキュラム改革について - その 1 - (仮題)」

担当: 古畑徹 (文学部、共通教育部会長)

第 55 回 日時: 1 月 20 日 (木) 16:20 ~ 17:50

場所: 角間キャンパス総合教育棟 2 階会議室

テーマ: 研究会「新・学部教育コンセプトの開発と実際」参加報告

担当: 西山宣昭 (大学教育開発・支援センター)

趣旨: 12 月 13 日、地域科学研究会・高等教育情報センター主催の研究会に参加したので報告する。研究会での 3 名の報告者と題目は以下の通り。

丹保憲仁 (放送大学学長) 「大学コンセプトの再構築

「大学の類型」「教育プログラム」とその評価」

芝井敬司 (関西大学文学部長) 「8 学科から総合人文学科統合の理念と展開」

臼井嘉一 (福島大学学長) 「3 学部 2 学科 6 課程体制から 2 学群 4 学類 12 学系体制への全学再編

ご都合により共同学習会に参加いただけない場合も、ご質問など事前にいただければ、当日の議論に活用させていただきます。

共同学習会への話題提供のお願い

大学教育開発・支援センターでは、教育改善や法人化後の大学環境の変化など、多様な視点から、教職員の間で自由に議論できる場を提供すべく共同学習会を企画してきました。今後も皆様のご意見やご希望を反映させながら企画を進めて参ります。例えば、授業作りや FD 関連の話題なども共同学習会で重点的に取り上げていきたいと考えております。共同学習会への大学教育についてのさまざまな話題の提供をお願いいたします。

学士課程教育の再構築について

大学教育改革が叫ばれて久しいが、激しく変遷する社会システムにいかに対応するかについて、大学教育の模索は今も続いている。課程区分の廃止、大学院重点化、専門職大学院の設置を経て、問題の所在がより明確になってきた。すなわち、4 年間の学士課程教育をいかに再構築するかである。ここでは、多様化、高度化を極める社会を生き抜く上で必要な教養とは何か、大学院教育の前提となる

専門基礎とは何かについての深い議論を必要とする。昨年12月13日、地域科学研究会主催のセミナー「新・学部教育コンセプトの開発と実際」に参加した。学士課程教育の再編に関わる提言や実践例について報告を聞くことができた。セミナーの概要については、1月20日（木）の共同学習会でも報告する予定である。ここでは、セミナーの報告者のお一人、丹保憲仁先生（放送大学学長）の提言について紹介したい。

「大学コンセプトの再構築～「大学の類型」「教育プログラム」とその評価」について報告された。日本では「大学」の定義は一つである。すなわち、学校教育法52条「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用能力を展開させることを目的とする」によってのみ規定されている。しかし、実際には、総合大学、単科大学、短期大学、高等専門学校など多種類の大学が存在する。丹保先生の提言は、専門的な研究の部分は少数の研究大学院大学に委ね、4年間の学士課程教育は、大学群の総体として担うというものである。提言の要旨は以下のようなものである。短期大学や単科大学などの52条のフルスペックを持ちにくい大学を複合的に活用する。このような考えをさらに拡張し、学生は主大学に属するものの、総合大学を含む多様な大学が提供する学習プログラムを自由に選択できるものとする。各種学習プログラムは、学習内容、レベルを明確にし、一定基準で公開自己評価する。学生は、学習設計をしかるべき機関（認定された大学、専門機関など）の助けを借りて行い、当該機関にキャリア記録登録する（入学料相当の設計登録料を支払う）。このような大学群の総体による学習システムを実現する具体的な方策として、学習プログラム（単位）ごとに授業料を支払う、プレリクイジット制度の導入と、イーラーニングの活用、学習プログラムの単位の標準化とレベルの厳密化を挙げられた。イーラーニングは現在急速に普及しつつあるが、個別の大学に閉じている限り、予習、復習としての活用に限定されるとの印象が強かったが、提言されたシステムでは、より大きな意義が生まれると感じた。また、本学共通教育機構の主導により、北陸6大学を結ぶ遠隔授業システムの運用が始まろうとしているが、提言に沿って考えると、大学間での単位標準化や厳密な成績評価を検討する上で有益なモデルケースとなりうる。

提言にある大学総体としての学士課程教育の構築の前提は、現存する大学がそれぞれに特徴のある学習プログラムを提示することである。しかし、井村裕夫先生（京都大学名誉教授）の解説（IDE現代の高等教育2004年1月号）にあるように、日本の高等教育制度はアメリカのそれを模したものであるにも関わらず、実質を伴った多層構造を持ったアメリカの高等教育システムとは大きく異なっており、各大学が個性を提示することこそが現在の学士課程教育における一つの課題となっている。本セミナーでは、芝井敬司先生（関西大学文学部長）が関西大学文学部における学科統合と学習プログラムを紹介された。この実践例は、学士課程教育を再考する上で一つのすぐれたモデルであるとの印象を強くした。これについては、次号以降あらためて紹介したい。（文責 西山）